

五箇山 <富山県> 合掌造り 山奥の小さな世界遺産

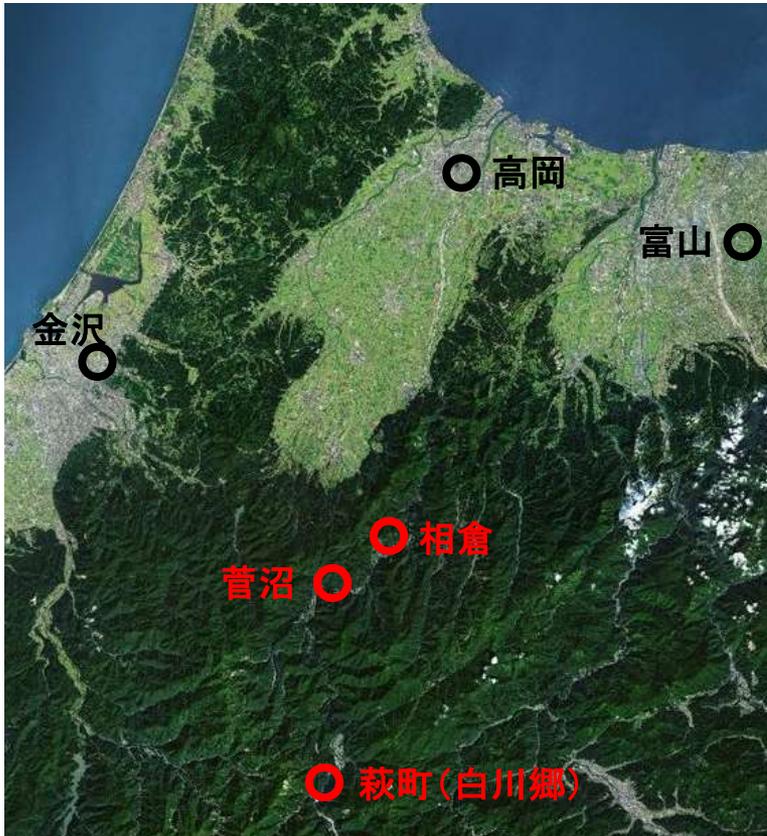
まちあるきの考古学

長野県北部から富山県南部、庄川上中流域の山間部には、合掌集落が点在しています。

そのなかで、合掌造り家屋が、群として良好な状態で残っている、白川郷(長野県)の荻町、五箇山(富山県)の相倉と菅沼、この3つの集落が世界遺産に登録されました。

日本の木造建築群の中でも、きわめて特異な要素をもつことが、その推薦理由として挙げられています。

急勾配の屋根(茅葺き)、屋根裏の産業的活用(養蚕)、それらを支える伝統的な大家族制など、その希少性が保護すべき世界の遺産と認められたのです。



合掌造り 雪深い地で 生活と生業が一体で営まれる空間



合掌造り家屋では、家内工業として、和紙漉き、塩硝作り、養蚕が行なわれていました。

江戸時代、塩硝は黒色火薬の原料として重宝され、その製法は門外不出とされました。五箇山では、雑草と蚕の糞を利用して抽出する「培養法」により生産されたようです。

ただ、明治以降も継続され、合掌造り家屋の大型化に寄与したのは養蚕でした。

合掌造りにすることで、屋根裏に小屋束のない広い空間が生まれます。江戸時代、養蚕業が活発になると、この空間を利用して養蚕棚を設置するようになったようです。明治以降、生糸生産が国策で拡大するにしたいがい、合掌造りの屋根は養蚕上として大型化し急勾配になっていきました。

合掌造り家屋の内部
一階の梁柱の重厚感(下写真)と
屋根裏(養蚕室・右写真)の広さが目を引く



付近のまちあるき
砺波平野 金沢